

【第16回年次大会 シンポジウム：海外交流の中でのジェンダーの諸相 要旨】

中国語吹き替え日本映画『追捕』（『君よ憤怒の河を渉れ』）について
——ジェンダーの視点から

呉保華

『君よ憤怒の河を渉れ』（以下『君よ』と略す）は、1976年に公開された151分の映画である。1978年に中国大陸で一般公開された折には約42分ものシーンがカットされ、109分ぐらいの中国語吹き替え版『追捕』（中国語タイトル）となった。カットされたシーンの約3分の2は映画全体の流れからみれば鑑賞に支障が生じない程度のものであり、後の3分の1は、当時どうしても削除しなければならない「中国の国情にふさわしくない」内容とシーンであった。内容は別として、今現在の観客から見れば、『君よ』における「中国の国情にふさわしくない」映像はせいぜい2、3分ぐらいのものでしかなかったのである。

『追捕』の出演者紹介の部分に映し出されている出演者のリストは次の表のとおりである。

出演者	役名	役柄
高倉健	杜丘冬人	東京地検検事
中野良子	遠波真由美	牧場主の一人娘
原田芳雄	矢村警部	本庁の警部
倍賞美津子	大月京子	バーのホステス
池部良	伊藤検事正	杜丘の上司
田中邦衛	横路敬二	黒幕の従犯
伊佐山ひろ子	横路加代	黒幕の従犯、横路の妻
大滝秀治	遠波善紀	牧場主、北海道知事選の候補者
西村晃	長岡了介	政界の黒幕、主犯
(以下略)		

この表だけを見ても日本人の観客はキャストが名優揃いなのでかなり豪華な印象を持っただろうが、中国人の一般観客にはその豪華さがほとんど分からなかった（今でも分からないかもしれない）。当時の中国では、上記の出演者の本名よりも『追捕』中の「杜丘」「真由美」「矢村」といった役名の方がよく知られ、またその人物像に至ってはディテールに至る部分まで良く認知されていた。

1. 完璧な男らしい男＝杜丘

角刈りで長身、日焼けした肌の色、スーツとネクタイに襟を立てたダスターコート姿、謹直な表情といった外見のみならず、高層ビルの浴室の窓からの脱出、熊に襲われた真由美の救出、熊に傷つけられて出血が止まらない矢村警部の腕傷を焚き火の火で焼いての止血、セスナ機を操縦しての警察の包囲網の突破などの数々の杜丘の行動は、新宿の人混みの雑踏、北海道の広々とした大自然、そして歌詞のないスキットの挿入曲などとの組み合わせで、鑑賞する中国人観客す

べてを魅了した。杜丘は一躍、中国人男性たちの偶像となり、特に女性（既婚女性も含めて）たちが求める理想の男性像（現在の中国の流行語で言えば「男神」）となった。

考えてみれば、中国における杜丘という理想の男性像の確立は、無論高倉健さんの男子力、演技力といった魅力そのものの所産だったと言っても過言ではないが、当時の中国の映画審査制度もその一助となっていたのではないかと思われる。何故ならば、36歳の元検事が救助したばかりの、一回りぐらい年下の真由美と洞窟で結ばれるシーンは、当時の中国人観客の目から見れば、そこまで行くには流れが速すぎて安易すぎるのではないかと思われ、受け入れられなかったからである。幸いにも、このシーンは審査によってカットされた。その時代の女性観客は、特に男女関係においては、理想の男性像にはその身にふさわしい行動をしてほしいと常に厳しい視線を向けていたのである。

杜丘は女性にもてるのか、都内に潜入する直前、体調が悪化して歓楽街の路地で倒れる寸前にホステスの大月京子（倍賞美津子）に救助された。杜丘が京子のアパートで熟睡している場面で、京子が服を脱いだとたん布団の中に潜り込むというシーンもカットされている。露出度は別として、洞窟中のシーンと同じように、これも杜丘の理想の男性像にマイナスイメージをもたらすシーンだった。

2. 「大したじゃじゃ馬」のような真由美

中国の一般観客の目に映っている杜丘のイメージは理想の男性像であり、男らしい男だったが、ヒロインの真由美の方は、日本人女性の女らしい優しさに満ちた理想的な大和撫子ではなかった。しかし、いったん命の恩人杜丘への恋に落ちてしまうと、情熱的且つわがままで、好き勝手に大胆な行動を取る真由美であっても、果敢に恋する自由奔放な女として中国女性の憧れの的となった。真由美がロングヘアを靡かせながら逃げる杜丘を馬に助け上げて疾走するシーンは、何度繰り返して見ても飽きない名シーンとなった。と同時に、杜丘が「なぜ俺を助けるんだ」と聞くと、「あなたが好きだから」と答える真由美のこのセリフは、抑圧された女性観客の内面の叫びと重なり、強く女性の心に響いた。詳細なデータはないが、その影響を受けて、好きな男性へ大胆に告白する女性の数が目に見えるほど増えたという事実が報告されるようになるほどであった。

東京から飛んできた矢村警部が遠波家の屋敷にやって来て、なぜ杜丘を突き出さなかったと真由美の父親を詰問する。そこに杜丘の隠れ家から戻って来た真由美は、「（杜丘は）命の恩人だから」「（私を）逮捕したけりや、したらどう？」と敢えて挑発的な言い方で答えたので、矢村警部は、「これは大したじゃじゃ馬だ、調教の失敗だ」と呟きながら、屋敷を後にする。この「大したじゃじゃ馬だ、調教の失敗だ」という矢村のセリフは、多くの男性観客がその口振りをまねたり、共感を覚えて使用したりすることによって流行語となった。無論、それは、権威に屈しない真由美の性格を如実に表している言葉だったが、一方で、男性が女性に対して抱いていた「もっと大人しくなってくれ」という願望を物語っていたのではなかろうか。

3. 完璧な男性像と日常を逸脱した女性像

中国で、いくつかのシーンの削除によって作り上げられた杜丘という完璧な男性像は、男性観客にとってみれば、どうしても越えられない幻のような存在だった。一方、真由美の大胆な所作によって触発された女性観客は、長い間まぎれもなくこの真由美のような存在に憧れ続けていたと言える。従って、同じ人物像に対する男女の受容の仕方を見ると、男性観客と女性観客との間に大きな差異ができていたと言えるのではないだろうか。

[参考文献・資料]

康東元 (2012) 「中国における日本の『推理小説』の受容の様相」『Juncture 超域的日本文化研究 03』名古屋大学日本近現代文化研究センター,48-52

王衆一 (2014) 「追悼高倉健『杜丘』の神話と啓示」人民中国

http://www.peoplechina.com.cn/wenhua/2014-11/26/content_655097.htm

中村繁夫 (2014) 「中国の国家主席も、健さんが大好きだった」東洋経済オンライン

<http://toyokeizai.net/articles/-/54534>

(ゴ ホウカ・上海交通大学日語系主任)